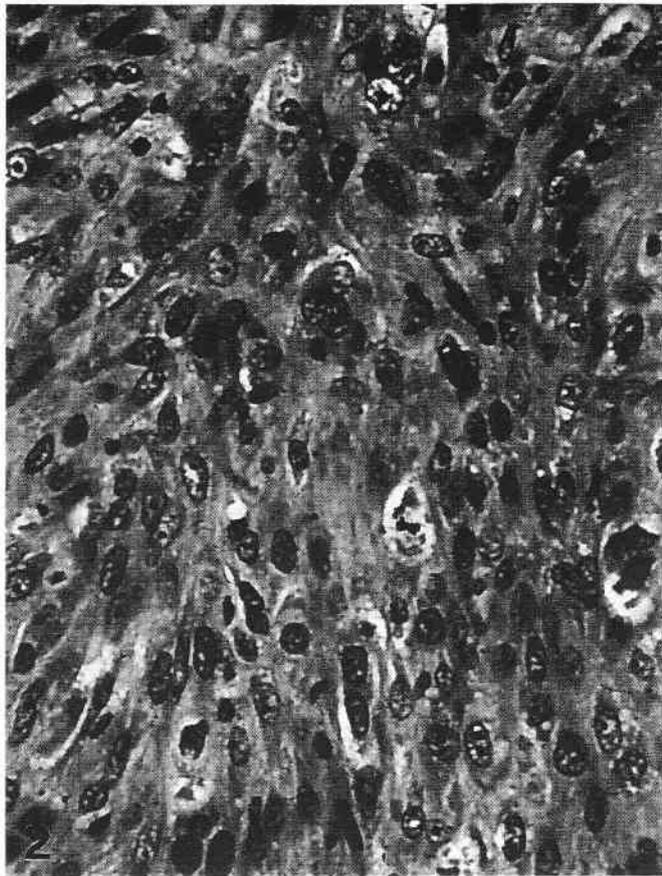
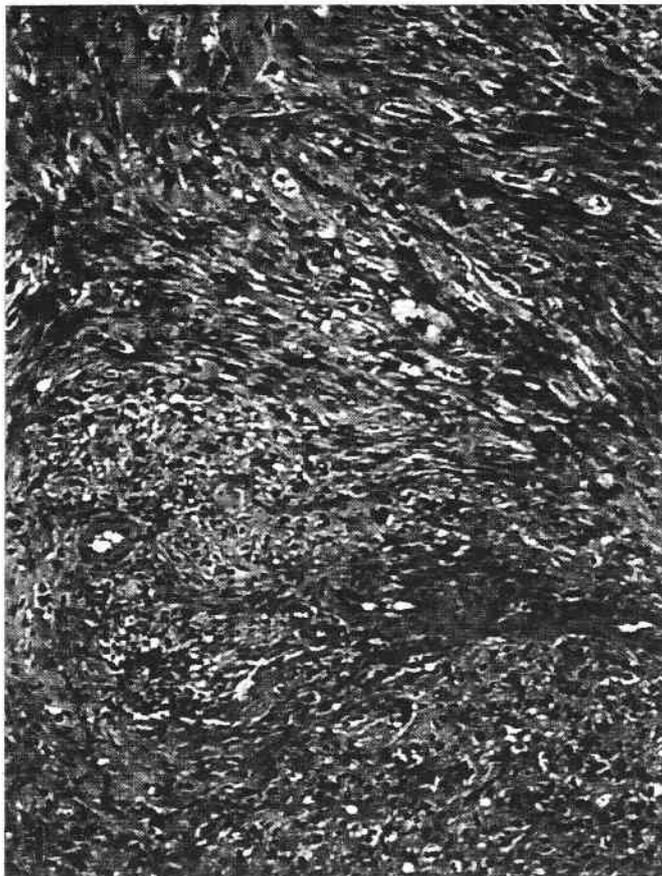


## 猫の皮下腫瘍

麻布大学獣医学部病理学第1講座出題 第39回獣医病理学研修会標本 No. 755



動物：猫，避妊雌，13歳。

臨床事項：97年春頃，右側胸部に発生した約φ2 cmの皮下腫瘍に気付く。その後，徐々に増大し，12月には10×7×3.5 cmにまで達したため切除（不完全切除）。98年6月には残存腫瘍は術前とほぼ同じ大きさにまで増大した。表面の自潰著しく，たびたび出血したが臨床的に遠隔転移は認められなかった。

ワクチン歴：89, 90, 92年アメリカにて右側側腹部に狂犬病予防ワクチン，左側側腹部にネコヘルペス1型，ネコカリシおよびネコ白血球減少症ウイルス（FVR'C-P）ワクチンを皮下接種。93～97年日本にて頸部～肩甲部皮下にFVR'C-Pワクチンを接種。

組織学的所見：腫瘍組織は異型性の高い紡錘形細胞より成り，複雑に交錯する細胞束を形成していた。腫瘍細胞は大小不同で1～数個の明瞭な核小体を持ち，時に巨核・多核の細胞も観察され，分裂像も頻繁に見られた。また，緻密でしばしば硝子化した膠原線維に囲まれ，細胞質が広く淡明あるいは泡沫状の細胞の増殖巣も観察され，至る所にリンパ球を主体として組織球などの炎症細胞が浸潤していた（図1, 2）。免疫組織化学的検索では腫瘍細胞は

vimentin 陽性，actin, smooth muscle actin は筋線維芽細胞と思われる細胞以外は陰性，desmin は陰性であった。電顕では腫瘍細胞はクロマチンに富んだ核と中程度に発達した細胞小器官を有し，細胞外には膠原線維が認められたが，基底膜，飲小胞，microfilaments は認められなかった。

診断及び考察：猫のいわゆる「ワクチン接種部肉腫」（vaccination site sarcoma: VSS）と診断し，組織診断名を線維肉腫とした。VSSは1992年に初めて報告されたが，猫に狂犬病予防ワクチンが義務づけられたのと時を同じくしてワクチン接種部位に発生する肉腫が急増したことが注目される。診断上，重要な点はワクチン接種歴を含む何らかの処置歴を有し，腫瘍発生部位が注射部位に一致すること，非常に高率に再発はするが，転移は稀という生物学的態度を示すことで，最終診断には組織学的・免疫組織化学的特徴を加味する。本例はこれらの諸条件にほぼ合致していた。VSSでは，いくつかの間葉系腫瘍の混合あるいは重複発生が多いことが知られており，組織像をより複雑にしている。なお，異物を含んだマクロファージの存在は必発所見とはされていない。